【富士市】

１人１台端末の利活用に係る計画

１．１人１台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

富士市では、1人1台端末を中心としたICT環境の整備により、個別最適な学びと協働的な学びを一体的な充実を図り、令和の日本型学校教育を推進し、すべての子どもたちの可能性を最大限に引き出し、生涯にわたって学び続けられるような資質・能力を身に付けられるような学びを目指していく。

GIGA第１期を通して、富士市の教職員のICTに関する指導力は年々向上していることが調査結果より明らかとなっており、子ども自身が課題解決や探究を通じて学ぶ姿勢を育てる授業にも日々挑戦してきた。その結果、子たちたちは自分のペースで学習を進められるだけでなく、多様な情報源にアクセスした学び方の定着が進み、個々の興味や理解度に応じた学び方が可能となった。そこからさらに深い学びへとつなげるため、「学びの伴走者」としての教師の指導やサポートの質の向上が求められている。学習の進捗状況や成果をデジタルで管理することで、教員や保護者は生徒の成長をより具体的に把握できるようになり、データに基づくフィードバックが行えるため、生徒一人ひとりに対して適切な支援を行うことが可能となる。これにより、学力向上のみならず、学習意欲や自己肯定感の向上にも寄与すると考えられる。

また、協働的な学びをより一層促進していく。オンラインでのコミュニケーションツールを活用することで、子どもたちはチームでのプロジェクトやディスカッションを行うことができ、他者との協力を通じて学びを深めることが可能となった。今後、複数の学校や地域を超えた協働学習や、地域の課題解決を目的としたプロジェクト学習の活性化により、単なる知識の習得を超えた深い学びが多く生み出されていくことを期待する。子どもたちは、異なる視点や意見を受け入れながら協力し合うことで、コミュニケーション能力や問題解決能力を高めることにもつながると考える。

さらに、デジタル学習データの活用により、子ども一人一人へのきめ細やかなフィードバックを行うことを目指す。教師は、子どもたちの学習進度や理解度を把握しやすくなり、個別にサポートを行うことが可能となる。これにより、子どもたちは自分の弱点を把握し、改善に向けて努力することができ、自立した学びを促進することにつながる。

このように、1人1台端末を活用したICT環境の整備により、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、未来を担う子どもたちが多様なスキルと視野を持ち、地域社会に貢献できる人材に成長するための学びの実現を目指す。

２．GIGA第１期の総括

(1) ICTの活用を推進する環境整備等

すべての子どもに１人１台端末を整備し、授業のみならず家庭への持ち帰りや校外学習など、端末の学びへの普段使いが定着した。

また、全ての学校の普通教室及び特別支援学級に、大型提示装置等を配備、ICT支援員の４校に１人の配置を実現し、１人１台端末の活用を推進した。

こうした環境整備により、本市における端末の活用率は非常に高くなり、全ての学校でほぼ毎日端末を利用する状況に至っている。GIGA第１期では、端末の故障が想定を大幅に上回る発生した。落下等による物損が多く、精密機器を扱う際の意識やスキル等を高めるためのリテラシー教育の充実を図ることがGIGA第２期の課題となる。堅牢性に優れた端末を導入し、子どもが自身の端末の状態への意識を高く持ち、自己管理能力を高めるような指導を行う。

ネットワーク環境については、現在、ほぼ支障なく日々の授業や校務を行うことができる環境が構築されている。一方で、国が示す推奨帯域を満たす学校の割合は低く、今後デジタル教科書等の普及により通信量が増加した場合に、ネットワークの負荷が大きくなることが想定されているので、子どもたちが1人1台端末やクラウドアプリをストレスなくスムーズに使用できるよう、安定した学校ネットワーク環境に改善していくことが重要となる。

(2)ICTを活用した学びの実践の総括について

①授業の変容

個々に応じた学び方で、子ども自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくスタイルの授業が増え、自分のペースで問題を解くことができるようになり、積極的に学習内容の定着を図ろうとする姿が見られるようになった。また、同じ目的や課題の解決に向けて、他者との交流を通して多様な価値観や考え方に触れながら、資質・能力を高めていこうとする授業が増えた。

例えば、シミュレーション教材を用いて、自分が納得いくまで条件を変えながら、試行錯誤し、一人一人の興味関心に応じて学びを深めたり、プログラミング教材を用いて、一人一人が試行錯誤しながら目的を達成するためのプログラミングを行ったりすることができるようになった。

②効果的なICTの活用

授業におけるICTの活用は進んでいるが、資質・能力の育成を実現するための効果的な活用方法や活用場面について、課題が残った。授業においてICTの活用に重点を置いてしまい、目標に迫ることを見失わないよう、今後さらに授業のねらいを明確化し、ICTの特長を生かした学びを深めるための実践について、市全体での実践例を共有し、研修を重ね、授業改善を進める。

③不登校児童生徒等の学びの保障

学校や教室には行きづらいと感じている児童生徒や入院中の児童生徒が、自宅や校内の別室、病院などからオンラインで授業に参加する機会が増え、学びの保障ができるようになった。

④特別支援教育の充実

文字の拡大や音声読み上げ、UD（ユニバーサルデザイン）フォントへの変換など、専用ソフトの利用により、文字の読み書きが苦手な児童生徒に対して、個々のニーズに応じた支援を行うことができるようになった。

３．１人１台端末の利活用方策

GIGAスクール構想が令和３年度から本格的に始まり、１人１台端末が子どもたちに行き渡るよう整備し、授業や家庭学習等で積極的に活用されてきた。今後も、この１人１台端末環境を維持し、GIGAスクール構想第１期の成果と課題をもとに、以下のように１人１台端末のさらなる効果的な利活用を図っていく。

(1) 個別最適・協働的な学びの充実

個別最適・協働的な学びを支えるデジタル環境のさらなる向上を目指し、１人１台端末から豊富で確かな情報にアクセスできるデジタルコンテンツの活用を推進する。また、教育データの収集・分析できる環境づくりを進め、児童生徒一人一人に最適な教材や学習方法を提供するとともに、児童生徒自身が自らの学びを調整しながら主体的に学び続ける「自立した学習者」の育成へとつなげていく。

(2) STEAM教育推進のための活用

本市の駅前再開発事業の中に「ものづくりSTEAMラボ」の建設が計画されており、プログラミングのできるロボットや3Dプリンタの他、グラフィックや映像、楽曲の制作ができるソフトなどを設置し、子どもたちが好きなことにチャレンジできる施設となる予定である。このSTEAMラボと、１人１台端末の環境を連携することで、子どもが端末上で考えたデザインが、STEAMラボの3Dプリンタで実際に形になったり、遠隔授業によりラボの職員からプログラミングなどに関する講義を受けたりするような学びの実現が期待される。子どもが新たな価値が創造されていく喜びを感じながら、価値や目的を創り出す力を育むことについて、大きな効果が発揮されると考える。

(3) 生成ＡＩの活用

授業や教育活動における生成ＡＩの効果的な活用方法について、先進的な事例に注目して研究を進めていく。発達段階を踏まえながら、生成AIの仕組みや限界についての理解を深め、適切な活用方法や生成AIとの付き合い方等について考える機会を充実させて情報活用能力育成を図っていく。また、積極的かつ適切な生成AIの授業での活用を進めるためにも、教職員が相似形の意識を持って校務へ活用することも推進していくことが重要である。

(4) 教職員の研修

個別最適な学びと協働的な学びの往還によって、自立した学習者を育成するために、教員の授業観の更なるアップデートが求められている。市や県の指定研究指定校での研究や本市が実施しているアフター５講座を豊かな授業実践が集う好機と捉え、GIGAタブレットを効果的に授業で活用する良い事例を市内全体で共有し、知見を広げる。

(5) 多様な学びの場の保障

静岡県では、令和７年１月から新たな学びの場として、１人１台端末からアクセスできる仮想空間「しずおかバーチャルスクール」を展開しており、自分のペースに合わせて交流、学習、体験を行うことが可能となっている。本プラットフォームの特徴の１つに、「１人１台端末での快適な動作」が挙げられており、自由度の高い学習環境で、オン

ライン教材をベースにした学習を進めることが可能となる。どの子どもにも多様な学びの場を保障するとともに、多様な人々と交流することを通して、創造性や問題解決能力を養うことが期待される。

(6) 「心の健康診断」システムの利用

本市が採用している学習eポータル「L-gate」から利用できる、子どもの心身の状況を把握するための健康観察システムの利用を推進し、子どもの心や体調の変化を把握し早期発見、早期支援につなげる。さらに、本市が実施している１人１台端末専用の相談窓口「ほっとデジタル相談・ふじ」と連携することで、不安や悩みを抱える子どもがスムーズに相談窓口にアクセスすることが可能になる仕組みを維持していく。子どものメンタルヘルスの悪化や小さなSOS問題が表面化する前から積極的に支援につなげ、未然防止を図るとともに、子ども一人一人が健康状態や気分の変化を把握し、自らのよりよい生活を目指して、生活習慣の改善を行うことができるようになることを目指す。